群教セ	G05 － 03
	平20.240集

小学校音楽科における 思いをもって音楽づくりをする児童の育成

―音楽を特徴付けている要素の働きと自然のイメージをつないで ―

長期研修Ⅱ 研修員　反町　恭子

《研究の概要》

本研究は、小学校音楽の表現「音楽づくり」で音をつくることへの様々な思いをもつことができるような方法を探った。具体的には、鑑賞活動と自然体験活動を通して「音楽づくりヒントカード」「イメージマップ」「音楽の設計図」に、感じ取ったり工夫点など自分の思いを記しながら、音楽を特徴付けている要素の働きと自然のイメージをつないでグループで音楽をつくる活動により思いをもって音楽づくりをする児童の育成を図った。

キーワード　【音楽－小　音楽づくり　鑑賞　自然体験　イメージマップ　音楽の設計図】

Ⅰ　主題設定の理由

音楽科の目標は、生きる力の育成に欠かすことのできない「豊かな情操を養う」ことである。

この豊かな情操を養うため、音楽科の現状の課題として、「感性を高め、思考・判断し、表現する一連のプロセスを働かせる力」「音や音楽を知覚し、感性を働かせて感じ取ることを重視すること」「歌唱の活動に偏る傾向があり、創作と鑑賞の充実が求められること」などが挙げられている。

本県の音楽教育に携わる小学校教諭に、音楽の授業で課題性を感じている領域について調査を行ったところ、58％の教諭が創作の領域に課題性を感じていると回答した。(2008.6 実施 71人)

具体的には、「題材の設定の仕方」「時間数」「授業の組み立て方」「記譜のさせ方」「積み重ねの必要性」などである。

協力校の児童（６学年：61人）について音楽の授業に関する事前調査を行ったところ、創作の領域は他の領域に比べ、楽しいと感じる児童の割合が低いことが分かった(図１)。

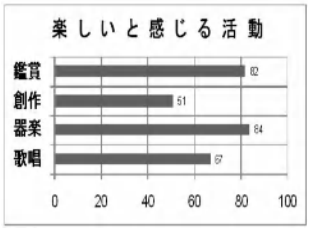


図1　協力校実態調査

注：6年生児童を100%とした割合

これらの実態から、創作活動として行ってきたリズム伴奏や効果音をつくる活動に加え、児童一人一人が思いをもち、自分にとって価値のある音をつくりだそうとする「音楽づくり」の活動を充実させることが重要であると考えた。

大切なことは、児童が主体的に音楽にかかわって活動することであり、学習の楽しさを実感することである。一人一人が自分の思いをもって音楽活動をするためには、多くのことを感じ取る力をはぐくみ、感じ取ったことを表現する力が豊かになるような指導の工夫を図る必要があると同時に、音楽をつくる喜びを味わうような学習活動を充実させたいと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

「音楽づくり」の活動において、音楽を特徴付けている要素の働きと自然のイメージをつなぐことで、児童が音をつくることへの様々な思いをもつことができるようになることを授業実践を通して明らかにしていく。

Ⅲ　研究の見通し

１　自然の様子が思い浮かぶ曲を比較聴取し、その音楽を特徴付けている要素とその働きを感じ取って、「音楽づくりヒントカード」に記入する活動を行うことにより、曲の感じと自然の様子をつなぐ力が付くであろう。

２　尾瀬学校で得られた自然の音や感動した体験を基にイメージマップを作成することにより、自然のイメージが膨らみ、表現したい自然の音への思いをもつことへとつながるであろう。

３　グループで自分の思いを出し合い、音楽の設計図を作成しながら、音を工夫していく活動を行うことにより、音楽を組み立てる楽しさを実感し、思いをもって音楽をつくることができるであろう。

Ⅳ　研究の内容と方法

1　研究の基本的な考え方

図２に研究の構想図を示す。

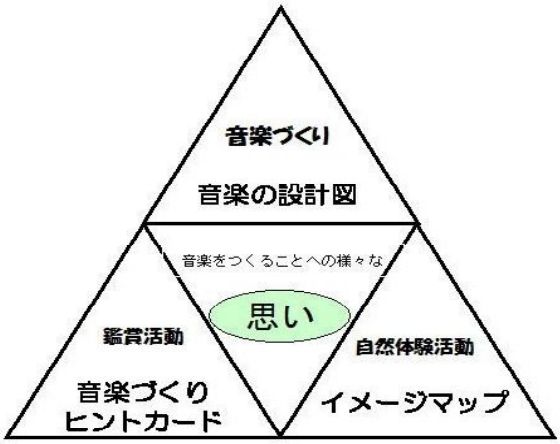


図2　研究の構想図

(1)　思いをもつということ

児童は、想像性豊かな曲に触れることにより、感性を働かせ（感性とは刺激に対してそれに反応する心の動き)「こんなふうに表現したらどうか」「もっといい表現にするために工夫できないか」「自分でも音楽がつくりたい」というような思いをもつ。この思いは、児童が音楽活動を楽しく、意欲的に行っていく原動力となり、主体的に音楽活動をするために重要である。

(2)　音楽をつくって表現すること

本来、「音楽をつくる」ということは、自然の音素材から何かを感じ、リズムや音で遊んだことから始まっている。「音楽をつくる」学習で音楽的に価値があるのは、音そのものに着目し、音楽の成り立ち、構成を学び取っていくことであり、大切なのは、音楽づくりの活動が、児童の音楽的な思考力・判断力・表現力をはぐくむ学習ととらえることである。また、新学習指導要領では音楽をつくる楽しさを体験させる観点から、創作活動を「音楽づくり」として示している。

(3)　音楽を特徴付けている要素とは

音楽は、音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、音階や調、拍の流れやフレーズ、繰り返し、問いと答えなどから成り立ち、これらを音楽を特徴付ける要素としてとらえる。本研究ではこれらの要素に着目して、音楽を分析的に聴き取らせ、要素の働きやかかわり合いを感じ取らせていく。このことにより、児童は「音楽のつくり方」が分かるとともに、具体的な表現方法の手掛かりをつかみ、自分が表現したいイメージに結び付けた音楽づくりへとつなげていくことができる。

(4)　自然体験活動を通して

自然体験活動=尾瀬学校において、秋の尾瀬の美しさは児童の心を感動させ、豊かで創造的な表現を導き出すと考える。自然の音素材に意識的に耳を傾ける活動は、自分の感性を可能な限り働かせていく活動でもあり、それは、音へのイメージをより膨らませていくことに有効であると考える。

2　研究の内容

(1)　曲の感じと自然の様子をつなぐ「音楽づくりヒントカード」

自然の音や様子を表現した曲を精選し、観点を絞って比較聴取し、音楽を特徴付けている要素の働きを感じ取る鑑賞活動を行う。図３はその学習過程を示したものである。

鑑 賞 活 動

比較聴取して曲の雰囲気を感じ取る。

①自然の音や様子を思い浮かべやすい曲を聴く。

鳥が鳴いているようだ　水がきらめいているようだ

②どうしてそのように感じたのか音楽の特徴を聴き取る。

ピアノの高い音　リズムが細かい　繰り返している
だんだんゆっくりしている

③音楽を特徴付けている要素とその働きを感じ取る。

鉄琴できらきら光る感じを細かいリズムで表している
だんだん強くすると迫ってくる感じがする

④即興的に試して遊ぶ（音遊び)。

音楽づくりは楽しそう　　自分でもできそう

①～④について音楽づくりヒントカードに記入する。

図3　鑑賞活動の学習過程

児童はこの学習過程に沿って、「音楽づくりヒントカード」に感じ取ったことを段階的に記入する。この活動を繰り返すことで、要素の働きと自然のイメージをつなぐことができ、「自分でも自然の音を音楽で表現できそう」という手掛かりをつかむことができる。

「音楽づくりヒントカード」は３枚で構成し、関連をもたせる。以下に「音楽づくりヒントカード」の具体的な内容を示す。

①　音楽づくりヒントカード1（図４）

児童が身近に感じている鳥の様子を表現した曲を３回比較聴取し、リコーダーの「音色」「奏法」「２つの音の重なり」を感じ取り、即興的に自分なりの鳥の様子を表現する。

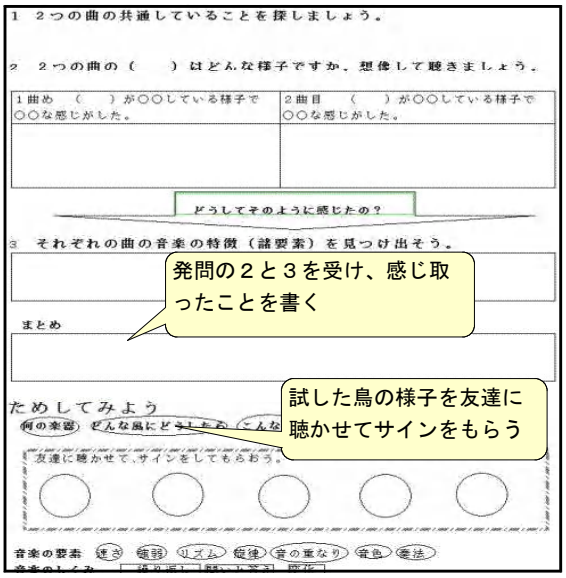


図4　音楽づくりヒントカード1

②　音楽づくりヒントカード2（図５）

水の様子を表現した曲を４回比較聴取し「音の重なり」「音色の違い」「旋律」「繰り返し」などを感じ取り、感じ取ったことを言葉や図形で表現する。

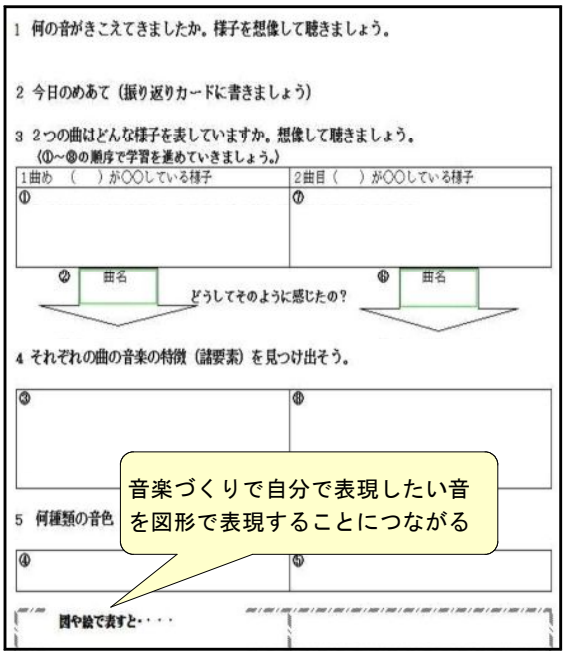


図5　音楽づくりヒントカード2

③　音楽づくりヒントカード3（図6）

音楽づくりヒントカード２に記入したことを生かして、自分で表現したい水の様子を考え、いろいろな楽器で水の様子を即興的に表現する。また、表現した音を言葉や図形楽譜で書き、音楽づくりの活動で表現したい自然の音へつながるようにする。

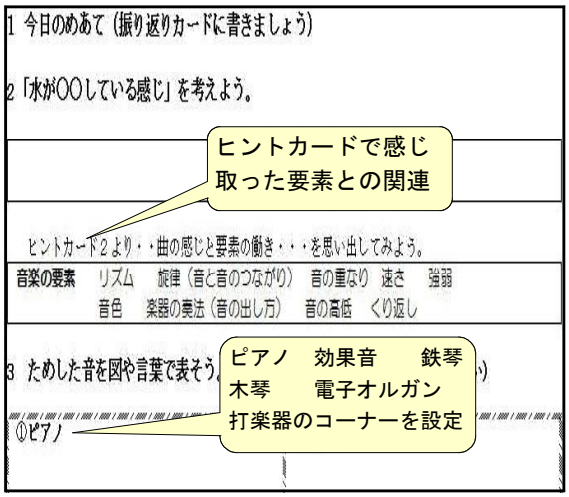


図6　音楽づくりヒントカード3

(2)　自然体験活動を通して、イメージマップを作成し、つくりたい音のイメージを膨らませる

児童は自然体験活動（尾瀬学校）について事前学習をし、想像したことを尾瀬イメージマップに記入する。そして「尾瀬の自然をイメージして音楽をつくること」を音楽の授業で行うという意識をもって尾瀬学校に臨む。児童はこの自然体験活動から得られた音や感動を、尾瀬イメージマップへさらに書き込む。このことは、自然のイメージを豊かに膨らませて「この音を、あの楽器で、こんな風に表現しよう」と、より具体的にイメージと音をつないでいくことができる。

(3)　音楽を組み立てる喜びを実感する音楽づくり

尾瀬の自然からイメージを膨らませて、一人一人が表現したい音は何かを明確にする。そして、この一人一人の思いがグループの中で共有され、音を工夫することにより、新たな響きや音のかかわり合いを楽しむことができると考え、グループ活動を取り入れる。グループで音楽の設計図を工夫していくことは、みんなで音楽を組み立てていくという楽しい体験ができると考える。図７は自然のイメージを膨らませて音楽を組み立てていく学習過程を、図８は音楽の設計図を示したものである。

自分にとって価値のあるものをつくる　　思考・判断しながらつくる　　友達の音とかかわり合いながらつくる

一人一人の思いを生かしながらグループでつくり上げていく過程

① イメージマップを基に一人一人の思いを出し合いグループのテーマを決める。

○　尾瀬のどんな様子を音で表現したいかという思いをグループの中で一人一人が出し合い、思いを共有する。一人一人の思いが生きるように尾瀬のイメージを話し合い、グループで１枚の尾瀬イメージマップを作成し、グループのテーマを決める。

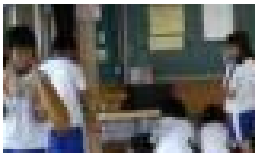
グループでイメージマップを作成

思い1　鳥の声をつくりたい　水の流れを表現したい

発想

② グループの中で一人一人が即興的に思いを表現する。

○「鳥のさえずりをリコーダーで表現する」「水の音を鉄琴で表現する」というような一人一人の思いを即興的に表現し、図形楽譜や言葉で書き留めておく。



即興的に表現

思い２　鉄琴で水の流れをつくってみたよ　この楽器はどうかな

生かす

③ 一人一人の即興的な表現をどのように重ねていくかなど考えながら音楽の設計図を作成する。

○　見通しをもって音楽づくりができるように、音楽の設計図を作成する。一人一人の思いを即興的に表現した音を、どこで誰がどのように表現するのか、などを作成していく。この音楽の設計図はグループで１枚とし、②で作成した図形楽譜を付箋紙に書き、付け足しや書き直しが容易にできるようにする。

設計図を紹介

思い３　ここは、一人ずつ演奏しよう　　全員で合わせよう
鳥が会話するように二人で合わせよう

創造

④ グループの中で試行錯誤しながらつくっていく。

○　設計図を基に、グループで音楽をつくっていく。グループの中でアドバイスし合い、いろいろ試してみる活動を繰り返し、音楽を練り上げていく。その際、工夫したところや改善したところは、設計図に書き込んでいくようにする。

グループでつくっていく

思い４　何回か繰り返した方がいいね　　奏法を変えたらどうかな

表現

⑤ グループの中で工夫する

○　表現を工夫していく過程では中間発表を取り入れる。自分たちの思いをほかのグループの人に言葉で伝えて演奏し、「よかった点や工夫する点」をアドバイスしてもらい相互交流を図る。そして、イメージに合ったよりよい表現になるように工夫する。

中間発表

思い５　速さはどうかな　強弱はどうかな　バランスはどうかな

工夫

⑥ 完成した音楽を発表しクラス全体で聴き合う。

○　中間発表を受けて「どんなところをさらに工夫したか」を言葉で伝えて演奏する。また「どんな観点で聴くか」を意識して聴く活動を通して、お互いの音楽のよさを認め合うようにする。「感想カード」に各グループの工夫されていたことを書き、感想を述べたり内容をグループごとに掲示したりして、充実感を味わえるようにする。

本発表を聴き合う

響きがきれいになっているな　尾瀬の自然の様子が伝わってきたな

認め合う

よかったところを掲示

図7　自然のイメージを膨らませて音楽を組み立てていく学習過程

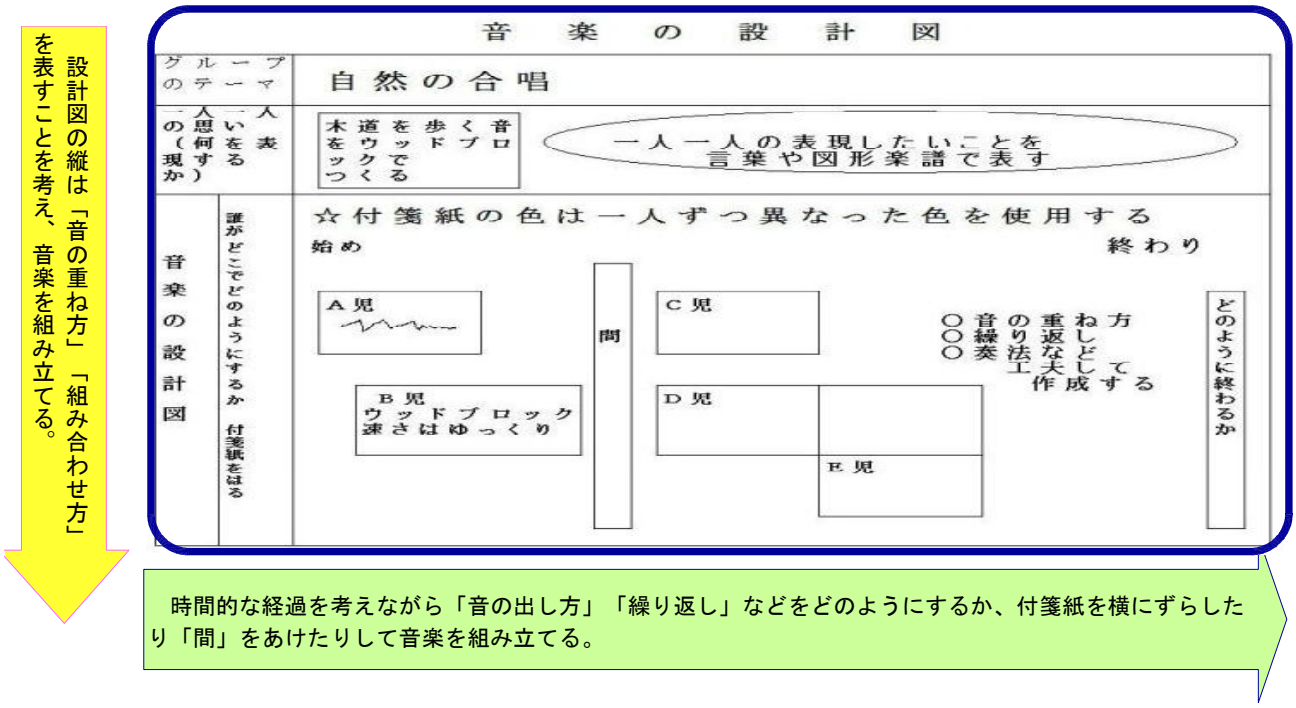


図８　音楽の設計図

３　研究の方法

(1)　実践計画

対　象	小学校第６学年　61名	授業者	長期研修員　反町　恭子	期　間	平成20年9月24日～10月24日
題材名	「イメージを膨らませて自分たちの音楽をつくろう」自作教材　（８時間扱い）				
鑑賞教材名	「森のひばり」　作者不詳　「リコーダーのマウスピースのための鳥の曲」　アンサンブル・コア作曲 「水源の朝」（水音の旅詩から）小久保　隆作曲　「雨」シェラーブネル作曲　「白鳥」（組曲　「動物の謝肉祭」から）サン・サーンス作曲				

(2)　抽出児

Ａ児	鑑賞活動については、進んで聴こうとする。歌唱、器楽、創作については、やや苦手意識をもっている。音楽づくりの活動で目当てを明確にし、自分なりの思いをもつことができるように支援し、主体的に取り組むことができるようにさせたい。

(3)　検証計画

	時	検証の観点	検証の方法と見取り	
検証1	1 2 3	自然の様子が思い浮かぶ曲を比較聴取し、その音楽を特徴付けている要素とその働きを感じ取って「音楽づくりヒントカード」に記入する活動を行うことにより、曲の感じと自然の様子をつなぐ力が付いたか。	○事前・事後の意識調査の記入事項の考察 ○観察（授業中及び記録ビデオ） ○抽出児の観察 ○振り返りカードへの記入事項の考察	○「音楽づくりヒントカード」への記入事項の考察 ・音楽を特徴付けている要素とどんな感じになるかを関連付けて記入しているか。 ・図形楽譜や言葉で表現したい音を記入しているか。
検証2	4	尾瀬学校で得られた自然の音や感動した体験を基にイメージマップを作成することにより、自然のイメージが膨らみ、表現したい自然の音への思いをもつことへとつながったか。		○尾瀬イメージマップへの記入事項の考察 ・感じたことを自分なりにイメージマップに記入しているか。 ・尾瀬イメージマップを生かしてどんな感じの音楽にしたいかという思いを記入しているか。
検証3	5 6 7 8	グループで自分の思いを出し合い、音楽の設計図を作成しながら、音を工夫していく活動を行うことにより、音楽を組み立てる楽しさを実感し、思いをもって音楽をつくることができたか。		○音楽の設計図への記入事項の考察 ・設計図に一人一人の思いが記入されているか。 ・一人一人の思いを生かし、グループのテーマを決めることができたか。 ・設計図を工夫しているか。

Ⅴ　研究の展開

1　題材の目標及び評価規準

目　標	曲の雰囲気は 音楽を特徴付けている要素とその働きに関係していることを感じ取ったり、自然に対するイメージを膨らませたりして、自分なりに思いをもって音楽づくりをする 。			
	ア音楽への関心・意欲・態度	イ音楽的な感受や表現の工夫	ウ　表現の技能	エ　鑑賞の能力
題材の評価規準	音楽をつくって表現することに意欲的に取り組もうとしている。	音楽表現の思いやイメージを膨らませ、それらを生かした音楽づくりの仕方を工夫している。	イメージに合うように音楽をつくって表現している。	音楽を特徴付けている要素を聴き取り、それらの働きが生み出す曲の様子や面白さを感じ取る。
歌唱				
器楽				
創作	○	○	○	
鑑賞		○		○
具体の評価規準	①自分なりの水の様子を表現しようと即興的に音を出して楽しもうとしている。 ②自分の思いを伝え、イメージを豊かに膨らませ、音楽をつくり出そうとしている。	①表現したいことについてのイメージを広げて、音楽づくりの仕方を工夫している。 ②友達の表現を互いに聴いて、そのよさや面白さ、工夫した点を感じ取ろうとしている。	①音の出し方や重なり方､奏法などを工夫して、イメージに合う表現をしている。 ②イメージが伝わるように改善点を考え、工夫して表現をしている。	①鳥の声のイメージの違いは、音楽を特徴付けている要素の働きに関連して生まれることの面白さを感じ取る。 ②水の様子のイメージの違いは音楽を付けている要素の働きに関連して生まれることの面白さを感じ取る。

2　指導計画抜粋（全8時間）

	○学習内容・学習活動　『使用する曲』	・主な教師の働きかけ
第一次　ねらい：　自然の音や様子を表現している曲を聴き比べ、そこから得られたイメージは、音楽を特徴付けている要素の働きが関連していることに気付き、表現の面白さを感じ取る。		
1・2・3時	○鳥の鳴く様子を表現している曲の2曲を聴き比べ、表現の違いの面白さを感じ取る。　音楽づくりヒントカード１ 『森のひばり』『リコーダーのマウスピースのための鳥の曲』 ○鑑賞の表現方法からヒントを得て「音と音のつなげ方」や「奏法」「リズム」をいろいろ試しながら、自分なりの「鳥の声」を表現して遊ぶ。　音楽づくりヒントカード１ （第二次の学習活動で生かす学習内容） ○水の様子を表現している曲の3曲を聴き比べ、表現の違いの面白さを感じ取る。　音楽づくりヒントカード２ 『水源の朝』『雨』『白鳥』 ○鑑賞の表現方法からヒントを得て、自分なりの「水が○○している感じ」の音を試して遊ぶ。　音楽づくりヒントカード３ （第二次の学習活動で生かす学習内容）	・「旋律の音のつながり」「奏法」「リズム」に着目して聴き取ることができるようにする。 ・つくった鳥の声を友達に聴いてもらい、楽しい音楽活動ができるようにする。 ・「旋律の進行」「音の繰り返し」「音色」「音の重なり」に着目して聴き取ることができるようにする。 ・いろいろな楽器で水の様子が表現できるように楽器コーナーを設定する。
第二次　ねらい：　尾瀬学校から感じ取った自然のイメージを膨らませ、一人一人の思いを生かしながら、音楽づくりをする。		
4・5・6・7・8時	○尾瀬学校から感じ取ってきた音や感じたことを基にどんな音づくりをするか考える。　イメージマップ ・イメージマップに感じ取った音や様子を書き込む。 ・自分のイメージマップを基に自分は何をどのように音で表現したいかを友達に伝える。 ・グループで話し合い、テーマを決める。 ○自分のイメージを実際に即興的に表現する。 ○一人一人の思いを生かした即興的な表現を「音楽の設計図」に書き込む。　音楽の設計図 ○「音楽の設計図」を基にグループで試行錯誤しながら音楽をつくる。 ・即興的に表現した思いをどのように重ねていくかなどを話し合い､音楽の設計図を組み立てる。 ・グループの中で聴き合いながら表現の工夫をする。 ○中間発表をし、さらに工夫するところを見付ける。 ・強弱、速さ、バランスなどを考えながら表現する。 ○他のグループから得たよい点を自分たちのグループでも生かそうと工夫する。 ○つくった音楽を演奏し合い、各グループのよさを感じ取る。 ・各グループでテーマや工夫した点を発表してから演奏し、それを聴く観点として、よい点を感じ取る。 ・相互交流し、お互いのよさを認め合う。	・表現したい音やイメージが重なっても、全員が違ってもよいことを知らせ、一人一人の思いを認め合うような支援をする。 ・グループの話合いの様子を観察し表現したい音や様子について第一次の活動を生かすように支援する。 ・一人一人の表現を生かしながら､時間的な流れを考えて「音楽の始め」「終わり」「重ね方」などの工夫ができるように働きかける。 ・ほかのグループのよいところを取り入れてもよいことを知らせる。 ・理由を付けて自分の感想が書けるような「感想カード」を作成する。 ・工夫した点を相互交流できるような場を設定する。

Ⅵ　結果と考察

1　全体の児童の様子について

（1）　自然の様子が思い浮かぶ曲を比較聴取し、その音楽を特徴付けている要素とその働きを感じ取って「音楽づくりヒントカード」に記入する活動を行うことにより、曲の感じと自然の様子をつなぐ力が付いたか

①　結果

ア　音楽づくりヒントカード1（図9）

鳥の様子を表現している曲を３回比較聴取し、音楽づくりヒントカードに記入した。

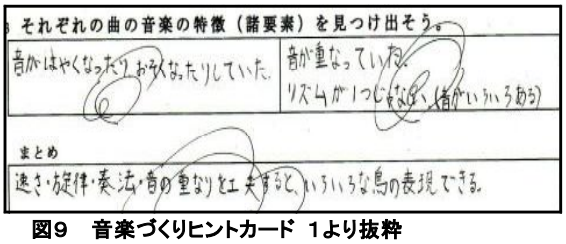


図9　音楽づくりヒントカード　1より抜粋

図９のように、児童は「鳥が楽しそうに鳴いている」「森の中で鳥が何種類かいる」と想像し、「速さ」「リズム」「音の重なり」について感じ取ることができた。

また、このヒントカードを基に、即興で自分なりの鳥を表現した（図10）。

鳥のいろいろな鳴き声ができるなんてすごいね。

図10　自分なりの鳥を試しながら友達に聴かせている様子

イ　音楽づくりヒントカード2（図11）

水の様子を表現している曲を4回比較聴取し音楽づくりヒントカードに記入した。図11のように児童は、曲の様子を特徴付けた要素が「リズム」「同じ旋律の繰り返し」「音の重なり」であることを感じ取ることができた。

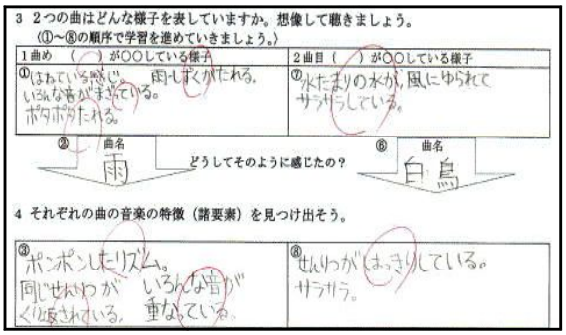


図11 音楽づくりヒントカード2より抜粋

また、４回目の比較聴取では自分なりに聴き取ったことを図形や言葉で表現できた（図12）。

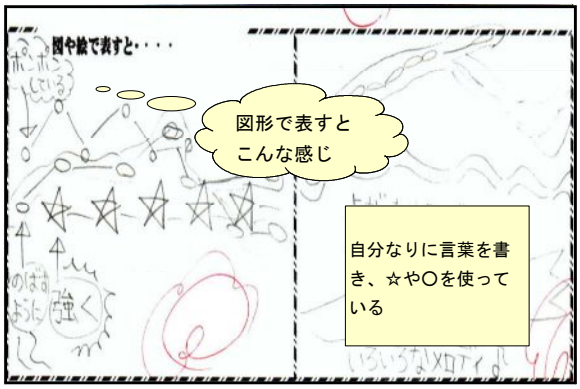


図12 ヒントカード2に書いた図形楽譜

ウ　音楽づくりヒントカード3(図13)

「音楽づくりヒントカード２」を思い出しながらいろいろな楽器で水の様子を試して遊ぶことができた。

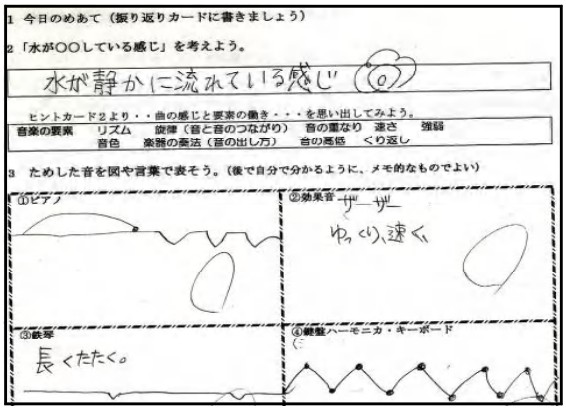


図13　音楽づくりヒントカード3　より抜粋

このとき、同じ楽器のコーナーで遊んでいた友達の音と音が偶然重なり合い「きれいな水の響きになった」とつぶやいた児童もいた（図14）。

それぞれの音が聞こえてきてきれい。

図14　効果音で自分なりの水の様子を試す

②　考察

それぞれの児童が「音楽づくりヒントカード」に感じ取ったことを記述したり、鳥の声や水の様子を即興的に試したりしていた。このような児童の様子から、自分なりに曲の感じと自然の様子をつないでいくことができたと考える。

(2)　尾瀬学校で得られた自然の音や感動した体験を基にイメージマップを作成したことは、自然のイメージを膨らませ、表現したい自然の音への思いをもつことへとつながったか

①　結果

尾瀬学校の事前と事後にイメージマップを作成したところ、量的な違いは多少あったものの、全員の児童が自分のイメージで尾瀬についてイメージマップを作成することができた。図15は、児童が作成した尾瀬イメージマップである。◎印は、事後に付け加えられたものである。

実際に尾瀬学校で自然体験活動をすることにより「光の輝き」「湧き水や川のせせらぎの音や様子」「鳥の声」「浮島の美しさ」「草紅葉の美しさや風が草を揺らす音」「熊よけの鈴の音」などを聴き、自然のすばらしさを体感してくることができたため、◎印が枝のようにのびていった。

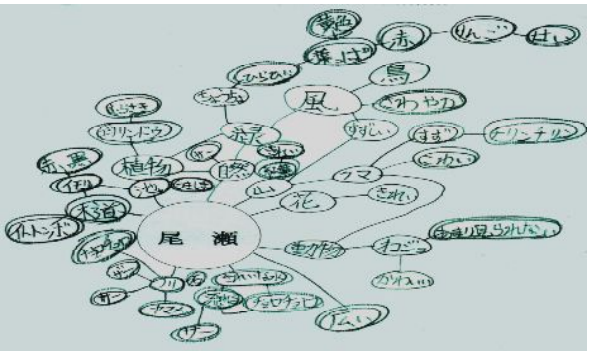


図15　イメージマップ

②　考察

尾瀬イメージマップの作成により、児童が自然の音や様子のイメージを膨らませたことが分かる。このイメージマップを基にしてそれぞれの児童がどんな音を表現したいか考えることができた。以上のことからイメージマップを作成したことは、表現したい自然の音への思いをもつことへとつながったと考える。

(3)　グループで自分の思いを出し合い、音楽の設計図を作成しながら音を工夫していく活動を行うことにより音楽を組み立てる楽しさを実感し、思いをもって音楽づくりをすることができたか

①　結果

ア　実践の様子より

図16のイメージマップを作成したグループは「キツツキが木をつついている様子」「水が流れる様子」「動物たちが起きてくる様子」「風や木がおしゃべりをしている様子」「四季」を表現したいと一人一人が考え、話合いをしてグループのテーマを「尾瀬の一年、豊かな自然」と決めた。

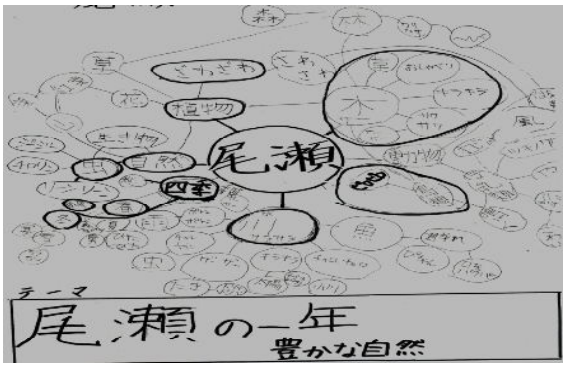


図16　グループで作成したイメージマップ

そのほかのグループでも表現したいことを活発に出し合いながら資料１のようなテーマを決めた。

資料1　グループで決めた尾瀬のテーマ

テーマ　(抜粋)
- ○　自然いっぱいのさわやかな尾瀬
- ○　尾瀬の自然の音色と季節の音
- ○　物語風　歩く・鳥・川・風・日光・水
- ○　きらきらしている秋の尾瀬
  風・光・木道・日光・水
- ○　秋の尾瀬　どんぐり・風・地下水・川

その後、児童は「音楽の設計図の縦と横」は何を示しているか考えた。音楽を特徴付けている要素と関連付けて考えることを促すと、縦は「音の重ね方」横は「時間的な流れ」であることに気付いた。そして児童は図形楽譜を書いた付箋紙を貼ったり、言葉を付け加えたりして、設計図を組み立てていった。この様子は全てのグループ活動で見取ることができた。

図17からは「時間的な流れ」や「音の重なり」を考えながら音を工夫した様子が見取れる。

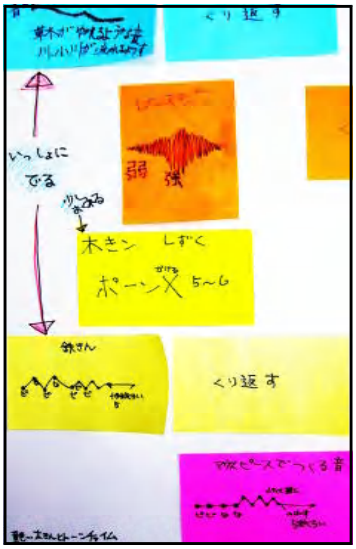


図17　音楽の設計図の最初の部分

設計図を組み立てる途中で音を出してみると、「ここは少しずらした方がいい」「トーンチャイムを重ねたほうがいい」などと改善点を見いだし児童はすぐに設計図に書き込みをした（図18）。

このように「音を出し、工夫する」ということを繰り返し（試行錯誤）、テーマに合ったよりよい表現になるように音楽を練り上げている様子が見取れた。

図18　試行錯誤しながら組み立てている様子

イ　授業後の振り返りカードの記述より

図19は、授業後に記述した「振り返りカード」と「振り返りカードの評価の集計」を示している。

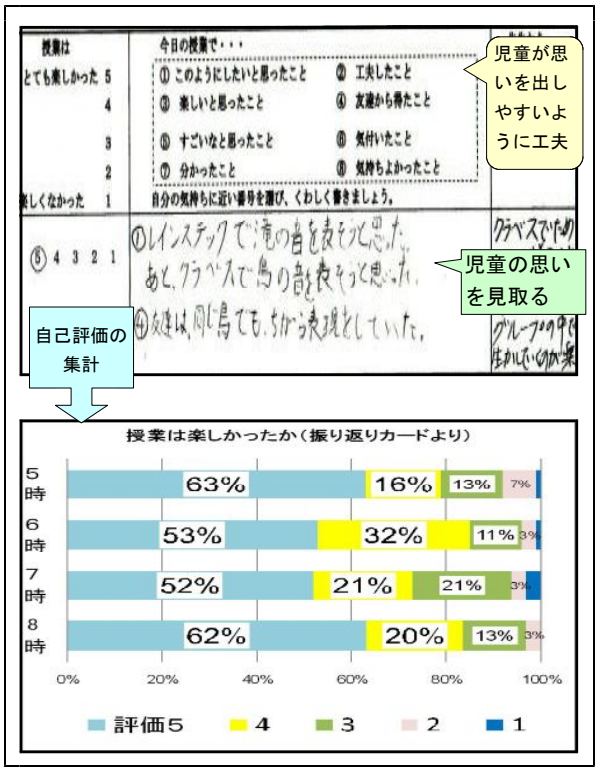


図19　振り返りカードと振り返りカードの評価の集計

振り返りカードには92％の児童が、毎時間の思いを記述していた。また、約80％の児童は授業が楽しかったと自己評価をしていることから満足感をもったことがうかがえる。

②　考察

グループのテーマを決めるのにじっくりと話合いをしたため時間がかかってしまったが、全部のグループがそれぞれの思いを反映したテーマになった。このことから、一人一人が自分の表現したい思いや考えを友達に伝えることができたと考える。

７時間目は、ほかの時間に比べ楽しいと感じる児童の割合がやや減少した。これは、中間発表で自分たちの表現したい音楽が、思いどおりに表現できなかったと感じた児童がいたためであると考える。このことから、児童が思いを達成させるために、技能面の支援の仕方をさらに考えていく必要があると感じた。

思いを表現するときの技能面での課題はやや残ったものの、結果ア及びイのことから、グループで自分の思いを出し合い、音楽の設計図を作成しながら音を工夫したことは、音楽を組み立てる楽しさを実感し、思いをもって音楽づくりをすることに有効であったと考える。

2　抽出児の様子について

Ａ児の事前・事後の意識調査の記述からは「苦手と感じていた音楽がまあまあ好きになったこと」「積極的に取り組むようになったこと」などの変容を見取ることができた。

グループ活動においては、話合いのまとめ役となっていた。中間発表では、グループの一人が欠席したためＡ児のグループはＡ児の思うように表現できなかった。Ａ児は「これではテーマに合う音楽ができない」と感じ、次時の活動では「いい表現にしよう」とみんなに声をかける姿を見取ることができた。

このような児童の変容は、資料２からも分かるようにグループの中で自分の思いを出しながら活動していくことができたためであると考える。

資料２　振り返りカードに記述されたA児の思い

- ○　友達と協力することに気付いた。
- ○　風のような表現をしたいと思った。
- ○　きれいな音にしたいと思った。
- ○　音の重なりできれいな音ができている。
- ○　風だけでなく魚がはねる音を友達と一緒に考えた。
- ○　途中で楽器を変えてイメージを変えることを工夫した。

Ⅴ　研究のまとめ

1　成果

本研究は「音楽づくり」の活動において、様々な思いをもつことができるような方法を探った。

具体的には、「音楽づくりヒントカード」「イメージマップ」「音楽の設計図」を工夫することにより、児童が感じ取ったことや考えたことなどを多く記していけるようにしたことや学習過程を工夫したり、振り返りカードに毎時間の目当てや感想を記述するよう促したりしたことである。

○　事後の意識調査では、「自分の表現したいことが言え、表現を工夫した」と約85％の児童が回答したことから、自分の思いを生かしてグループ活動ができたと考える。

「音楽づくりの学習過程の工夫」「学習の目当ての明確化」「記述を見取った支援」を図ったことが児童に有効に働き、児童が「表現を工夫しよう」という意識をもつことへとつながったと考える。

○　事後の意識調査の感想の記述に「友達の考えを聞いたりほかのグループの発表を聴いたりしたことにより、自分とは違うよさを発見した」「一人よりもグループで音楽活動をした方が楽しい」とあったことから、この実践が児童にとって「友達とのかかわり合い」に大切な場となったと言える。

○　音の組み立て方を工夫したことは、新指導要領の共通事項で示している「音楽の縦と横の関係などの音楽の仕組み」へ着目することへと発展すると思われる。

○　自然の音とイメージをつないだ活動を行うことにより、身近な自然の音を意識するようになった児童がほとんどで、このことは多くのことを感じ取り「感性の豊かさ」「心の豊かさ」をはぐくむことへとつながっていくと思われる。

また、本研究では鑑賞活動で鳥と水の様子を表現した曲を数回比較聴取したが、ほかの自然の様子を表現した曲でも「音楽づくりヒントカード」の活用は有効であると思われる。

○　実践の相乗効果として、「音楽が好き」と答えた児童が事前より13％増加し「音楽をなんとなく聴いている」と答えた児童は一人もいなくなった。また、図20に示すように全ての音楽活動において「楽しい」と感じる児童の割合が増えた。特に音楽づくりでは顕著に児童の変容が見られた。

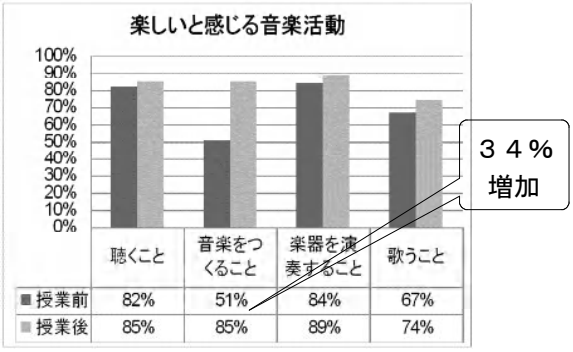


図20　実践後の児童の意識調査の結果

これらのことから、音楽を特徴付けている要素の働きと自然のイメージをつないで音楽づくりをしたことは、思いをもって音楽づくりをする児童の育成に有効であったことが明らかになった。また、児童は楽しさを実感しながら活動することができたと考える。

2　課題

本研究の音楽づくりで児童が使用した楽器は、「レインスティック」「トーンチャイム」「マラカス」「鉄琴」「木琴」が多かった。「奏法」「音の重ね方」「繰り返し」「始めと終わり」などにそれぞれ表現の工夫が見られたが、旋律的なまとまりがあればさらによいのではないかと感じた。

このことは、これからの音楽づくりの活動の視点として新学習指導要領に挙げられている「音を音楽へと構成すること」の指導の工夫が今後の課題として残ったと言える。

低学年から、自然の音や身の回りの音に耳を傾け、感じたことを即興的に表現する活動や音楽の要素や音楽の仕組みに着目した活動（例えば、問いと答えを取り入れたリズム遊びや音を限定した旋律づくりなど）を計画的に取り入れながら、「音楽づくり」の活動を積み重ねることが大切である。

本研究で得られた成果や課題を踏まえ、小学校での６年間を見通した音楽づくりを実践し、中学校での創作活動「音素材を選び、まとまりを工夫して音楽をつくること」や「音環境への関心を高めること」へと発展させていきたいと考える。

〈主な参考文献〉

・高須　一、金本正武　編著　『小学校音楽の授業づくり』　明治図書出版（2005年）